



官職備考

四

73
6262
4止





73  
6262  
4

本朝官職備考卷之七目錄

稱號大意



去五味均平藏



帝王	一丁	太上天皇	一丁	春宮	二丁
中宮	二丁	皇右宮	二丁	皇太后宮	三丁
太皇太后宮	三丁	女院	三丁	國母	四丁
內親王	四丁	女王	四丁	女御	五丁
御息所	五丁	更衣	六丁	御臺盤所	六丁
御匣殿	六丁	宣旨	六丁	親王	七丁
諸王	八丁	公卿	九丁	諸臣	九丁
公達	九丁	殿上人	十丁	諸大夫	十丁
侍	十丁				

諸家大意

大目録





攝家

十一

清華

十二

大臣家

十二

羽林家

十三

名家

十三

新家

十三

神祇家

十二

和晋家

十二

文章博士家

十三

明經道家

十三

能書家

十三

神祿家

十三

和琴家

十三

琵琶家

十三

筆家

十三

笛家

十三

笙家

十四

算策家

十四

蹴鞠

十四

裝束家

十四

女官大意

内侍司

十四

藏司

十六

書司

十七

菜司

十七

兵司

十八

閹司

十八

殿司

十九

掃司

十九

水司

十九

膳司

十九

酒司

二十

縫司

二十

上臈

二十

小上臈

二十三

中臈

二十三

下臈

二十四

命婦

二十四

藏人

二十四

女官

二十四

主殿

二十五

得選

二十五

刀自

二十五

采女

二十六

東堅司

二十六

雜仕

二十七

上臈

二十七

女孺

二十七

院司大畧

院廳

二十七

廳官

二十八

院殿上人

二十八

院藏人

二十九

上下北向

二十九

雜色

二十九

召次所

二十九

別納所

二十九

御眼所

二十九

御厨子所

三十

進物所

三十

文殿

三十

武者所

三十

御隨身所

三十

御厩

三十

僧官大意

大明寺



御門跡

一丁

諸宗

一丁

菩薩

一丁

國師

一丁

大師

一丁

僧正

一丁

僧都

一丁

律師

一丁

威儀師

一丁

凡僧

一丁

從儀師

一丁

法印大和尚位

一丁

法眼和尚位

一丁

法橋上入位

一丁

傳燈大法師位

一丁

傳燈法師位

一丁

傳燈滿位

一丁

傳燈住位

一丁

傳燈入位

一丁

法務

一丁

已講

一丁

内供奉

一丁

阿闍梨

一丁

上座

一丁

寺主

一丁

都維那

一丁

座主

一丁

檢校

一丁

別當

一丁

長者

一丁

寺務

一丁

長吏

一丁

執行

一丁

本朝官職備考卷之七

○稱號大意

湖西隱甫三宅帶刀

編集

帝王

本朝ノ例ハ人皇ノ最初神武天皇神代ノ蹤ヲ繼テ

登極ノ位ニ升リ萬國ヲ治玉ヒレヨリ以來百王ノ後ニ

至テ世王ヲマテ誠ニ天神ノ御苗裔トシ四海ノ外ヲモ

惠守セ玉フ至尊ノ御位ヲ帝王ト稱シ奉ル天ヲ父トシ

地ヲ母トシ廿廿世玉イテ天地宏犬ノ仁心ヲ以テ民ヲ治

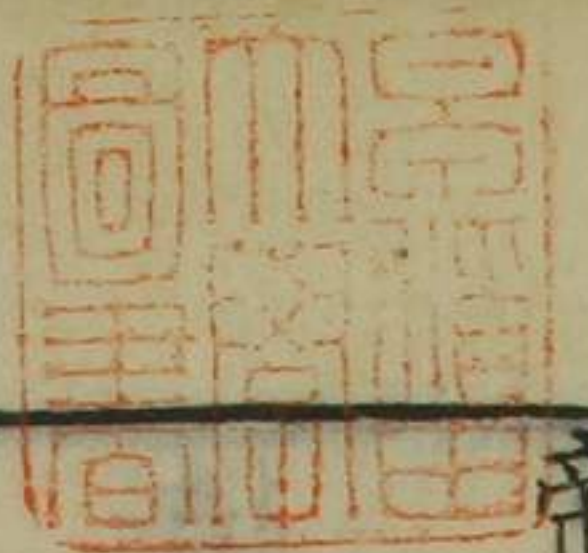
玉ヘバ凡庸ノ種ナラズトテ天子氏稱シ奉ル亦至尊ノ

御諱ヲ輕々シク不可稱トテ主上氏稱シ奉ル萬葉ノ主

ニメ極テ尊クマシマスト云ノ意ナリ異朝ノ例ハ帝太

昊伏羲炎帝神農黃帝軒轅唐帝堯虞帝舜何レモ聰明ノ

聖人ニテ萬國ヲ治メ萬民ヲ惠玉ト萬機ノ政ヲ宰玉ト





主宰ノ功 宏大ニメ 天地ニ類シ玉ヘリトテ 帝ト称奉ル  
帝ハ主宰ノ義ナリ亦夏禹主 設湯主 周文主ハ或ハ天命  
ヲ受テ 萬衆ノ主トナリ或ハ 天下ノ願ニ應ビテ 宝祚ヲ  
受テ 天地人ノ理ニ合セ玉フ 君ナレバトテ 玉ト称奉  
ル 秦ノ始皇帝 六國ヲ匹テ 天下ニ君トナリ我ヨリ 萬世  
ニ至ニテ 皇帝ト称スベレ 朕其用業ノ始ナレバトテ 始  
皇帝ト号ス 皇帝ノ号是ヨリ 興テ 後代ニテ 用來レリ 前  
漢ノ時 史官ノ事ヲ 記スニ 御諱ヲ 可斥言ニ アラズトテ  
上ト称ジ 奉ル 本朝ノ 主上ト称スルモ 世義ナルベレ  
太上天皇 帝王ノ 御位ヲ 勅宮ニ 御禪讓アリテ 治世ノ 政  
ヲ 適サセ玉フ 後帝王ヨリ 尊號ヲ 故リテ 太上天皇ト称  
ジ 奉ラル 或ハ 上皇氏 崇申サル 亦 前上皇 御座アル時ハ

新院 称ジ 奉ル 或時 議ニ 依テ 本院 亦ハ 一院 氏 称ジ 奉  
ル 御節ヲ 口サセ玉ヒ 法門ニ 入セラル、ヲ 法皇ト 称シ  
奉ル 其外 聖躬ノ 長ク 榮サセ玉フ 御禮ナレバ 御前ヲ 仙  
院 亦ハ 仙洞 氏 号セラル、ナルヘシ  
春宮 當代ノ 皇子 多ク 御座ト云 氏 別シテ 聰明 睿智ニテ  
宝祚ヲ 繼セラル、ベキ 御方ニ 先必 儲君ノ 宣下ニ 示レテ 次  
ニ 春宮ノ 宣下ヲ 蒙ラセ玉ヒ 皇太子ニ 立セラル、ヲ 春  
宮ト 称ジ 奉ル 或ハ 皇子 不御座時ハ 御連枝ノ 宮ヲ 春宮  
ニ 立サセラル、例モ 少カラズ 春宮ノ 天子ニ 繼テ 宝祚  
ニ 并リ 國主ヲ 治玉フハ 春ノ 天地 生物ノ 意ヲ 奉テ 万物  
ヲ 生育シ玉フニ 偕タルヲ 以テ 春宮ト 称ス 四時ヲ 四方  
ニ 配當スレハ 春ハ 東ニ 當テ 万物ノ 生意モ 東方ヨリ 興



ルニ依テ東宮正稱ス與ニ皇太子ノ別稱ナリ或ハ童擣  
氏鶴禁氏稱シ奉ル其義上ニ詳ナリ

中宮 律古ハ天子ノ正妃皇母皇祖母ノ三宮ヲ惣テ中宮  
ト稱シ奉ル四十九代光仁帝ノ御宇始テ正妃ヲ尊テ中

宮トシ天應元年ニ中宮職ヲ置テ大夫亮以下ノ官ヲ立  
ラレテ後皇后中宮ノ兩宮相並テ與ニ天子ノ正妃タリ

桓武帝ノ御宇ヨリ皇后中宮ヲ並置玉フナリ

皇后宮 神武天皇御年五十二歳ニメ豊葦原中州盡ク王

化ニ張スルニ依リ帝都ヲ太和國笠籠邑ニ作テ檀原宮

ト名ケ帝位ニ即世玉フ卅年正妃ヲ尊テ皇后ト稱セテ

ルヨリ以來御妃ヲ皇后ト稱シ奉ル異朝ノ例ハ周人

始テ玉妃ヲ后ト稱スルノ後秦ノ始皇帝位ニ即テ其後

ヲ皇后ト稱ス漢ノ高祖七年天子ノ位ニ即テ秦ノ例ヲ

追テ亦其後ヲ皇后ト稱ス是ヨリ流例トナレリ

皇太后宮 天子ノ御母ノ后位ニ登玉フヲ皇太后ト稱ス

ル一公式令ニ見タリ人皇第二饒靖天皇元年正月一御

母路禰五十鈴姫ヲ尊テ皇太后ト稱スル以來ノ例ナリ

異朝ノ例ハ秦ノ昭王其母辛氏ヲ尊テ宣太后王母ト稱

セシヨリ太后ノ號興リテ漢ニ至テ始テ母ヲ皇太后ト

稱セリ

太皇太后宮 天子ノ祖母ノ后位ニ登玉フヲ太皇太后ト

稱スル一公式令ニ見タリ魏ノ始ハ何ノ御世ニ興ル

ト云テ分明ナラズ四十七代廢帝天平宝字四年十二月

ニ祖母ヲ太皇太后ト稱セラレシ一續日本紀ニ見タレ



ハ是ヨリ以前ニ世尊號アリト見タリ  
皇后嘉智子ハ煇城帝ノ后ニメ文徳帝ノ祖母ナルヲ以テ  
太皇太后宮ト稱セラレ、類ナリ異朝ノ例ハ三代ヨ  
リ秦ニ至テ其号ナレ前漢ノ第六武帝ノ帝位ニ升玉  
魯ノ儒者申公ヲ迎テ明堂ノ事ヲ議セラル、ヲ太史司  
馬遷儒林傳ニ於テ太皇寶太后好老子言ト云リ寶太后  
ハ文帝ノ后ニメ武帝ノ祖母ナルニ依テ太皇太后ト稱  
セリ是ヨリ以來其号アリ

天子ノ御母ノ中宮ノ位ニ登世玉ト門院ノ號アル  
御方ヲ母院ト稱奉ル先ハ皇太后ノ御事ナリ併ラ母院  
ノ始ハ六十六代一條院ノ御宇ニ右府兼家公ノ御女梅  
壺皇太后誼子ハ圓融院ノ后ニメ一條院ノ御母アリ

御下升世玉イテ東三條院ト號ス世等ヲ母  
院ノ始申スベキカ是ヨリ以來中宮多クハ御位ヲ退  
世玉ノ後ニ門院ノ号アリ待賢門院美福門院ノ類ナリ  
亦皇后御更衣ナドノ御方モ天子ノ御母公ナレハ御  
薨逝ノ後ニ贈号ヲ賜リテ門院ト稱セラレ、例モアリ  
蓬春門院新先儀門院ト稱スル類ナリ皆贈号ト云凡  
院ノ例ナルベシ

天子ノ御母ヲ國母ト稱シ奉ル皇太后亦ハ母院ノ  
類ナリ其号ハ何ノ御宇ニ始ルコト不分明ト云凡陽成院  
元慶三年三月廿三日淳和帝ノ太后御崩ニシケケルヲ  
己日國母可謂至尊天下臣民何無喪禮ト云コト代實錄  
ニ見タレハ是ヨリ以前モ國母ノ号アルベキカ近クハ



贈左大臣龜率ノ御母藤原野子ハ順徳院ノ御母公ニメ  
後鳥羽院ノ后タルニ依テ國母ト称ジ奉ル類ナリ

内親王 天子ノ御孫妹並ニ皇女等ノ親王宜下ヲ蒙ラセ

玉ノ御方ヲ内親王ト称ジ未蒙宣下御方ヲ皇女ト称ジ

奉ル宣下ノ例ハ持統天皇ヨリ以前ニ興ト見タリ位階

ハ男親王ノ如ク一品ヨリ四品ニ至ル一品氷高内親王

二品泉内親王三品永主内親王四品長谷部内親王ノ類

ナリ

女王 天子ノ御孫曾孫玄孫ヲ都テ女王ト称ス或ハ宣下

ヲ蒙ラセ玉ハ内親王氏称セラル宣下ナクレバ女王

ナリ其例男諸主ノ礼ニ似タリ玄孫ノ御子ハ五世ニ及

ズニ依テ官人命婦ノ例ニ准ジテ女王ト称セラズ是

文武帝以来ノ儀ト見タリ詳ニ令義解ニ出タリ往古ハ

必シモ親疎ニ不拘ト見ユテ忍海部女王ハ直ニ名蒸帝

ノ皇女ナレ玉女王ト称シ高田女王ハ天武帝ノ十世ノ

御孫ナレ玉命婦官人ノ例ニ不准シテ女王ト称セラレ

是其称号ヲ未制以前ノ礼ト見タリ

女御 天子ノ御專ノ中宮ニ次セ玉ヲフ女御ト称ジ奉ル

別ニ御殿ヲ作テ置セラル儀式嚴重ナリ其始ハ雄略天

皇ノ七年ニ吉備田次ガ申ニ依テ推媛ヲ召テ女御ノ位

ニ備玉フ日本書記ニ見タリ是ヲ濫觴ト称スベシ亦

女御在ラス時ハ女御代ヲ畧シ女御代アレハ女御ヲ畧

セラレ多クハ女御ヨリ中宮ニ轉セラレヲ以テ眞貴ノ

儀式他ニ異ナリサルニ依テ執柄大臣家ノ御娘或ハ名



家宗徒ノ人人ノ御娘ナド參セラル、ト見タリ御堂ミタ開ヒラ白ハク  
 道長ノ御娘藤原威子イキ後一条院ノ女御ニ備リ勸修寺大  
 納言高藤ノ御娘藤原滿子ミツコ延喜帝ノ女御ニ立玉ヲ類ナ  
 リ異朝ノ例ハ女御ハ御妻ナリ玉ノ薨シ寢ニ御スルヲ  
 掌シル古ノ八十一御妻ナリト云一十二經註ニ見タリ  
 御息所 東宮ノ御妻ヲ御息所ト稱ス東宮ノ未即帝位ノ  
 時大臣納言ノ御女ナドノ御寢變他ニ異ナルヲ稱シ奉  
 ル源氏物語ニ六条御息所ハ桐壺ノ御門ノ御弟東宮ニ  
 立世玉ヲ時ノ妻也ト云類ナリ其外大納言藤原能信ノ  
 女茂子後三条院ノ東宮ニ立世玉ヲ時御息所トナリ皇  
 子貞仁ヲ設サセ玉ノ是ナリ六十年代醍醐帝ノ時大納言  
 定國ノ女和香子女御ノ位ニ備リ玉イテ大將御息所ト

號セラル是ハ天子ノ未即帝位東宮ノ御時ヨリ御寢  
 リレ故ナリ  
 更衣 禁内ニ主上ノ御衣ヲ召更玉ヲ兩アリ大中納言ノ  
 御女ミメホ參テ其兩ヲ司リ玉ヲ更衣ト云テ參議サニ大等オホ權ケン  
 帥シ在原ノ行平ノ卿ノ女清和帝ノ更衣トナリ玉ヲ類ナリ然  
 レ多クハ公卿ノ御女參ラル侍臣ノ女ホハ時議ニ依ル  
 ト見タリ  
 御臺盤ミタハシ所 清凉殿ノ中ノ吳竹臺ノ西ニ臺盤所アリ女官  
 常ニ飲食スル所ナリ所ヲ司ル上臈ヲ御臺盤所ト云  
 フ亦時ニ依テ内侍所ヲ司ルニ依テ内侍所ミ氏云テ神  
 鏡ヲ納玉ノ内侍所ノ儀ニアラス抑ノ此臺盤所ハ御殿ノ  
 近邊ナルニ依テ女官ノ中モ卑賤ノ輩ハ出入ヲ不許



ト見タリ順徳院ノ御説ニモ基盤所何トナク万人乱入  
ス亦不可然ナリ執柄並ニ子息ハ勿論ナリ其外ハ殊  
ニ難去大臣納言ノ間ニ兩三人ハカリ出入アルベシ近  
代帝ノ御聖ノ間數輩ニ及テ御乳人御外男ハ勿論ナリ御  
乳人ノ子モ一人ナトハ聽玉ヲ亦侍讀ノ役ハ君同ニ參  
ジ御召ニ依テ參ルノ由禁秘抄ニ見タリ

御匣殿 常寧殿ノ北貞觀殿ノ中ニ卅殿アリ御服ノ裁縫  
スル所ナリ此所ヲ司ル上蔭ヲ御匣殿ト云テ大臣納言  
ノサナド參セラレ堀河右府賴宗公ノ御サ後冷泉院ノ  
時一御匣殿ニ參ラレ類ナリ  
宣旨 是ハ院中ニテ繼仕兩次ノ女官ナリ源氏物語ニ那  
石姫君乳母ノ母故院ノ宣旨ニ補スト云是ナリ

○諸家大意

親王 皇子ヲ親王ト稱シ奉ル一何ノ御家ヨリ始ルト云  
一分明ナラズ此四代推古天皇五年ノ紀ニ始テ親王ノ  
號アリ其後相續テ此稱アリ凡ノ帝王ノ御伯父叔父亦  
ハ御連枝諸皇子ホノ中必シモ年齒ノ老ヤニヨラス宣  
下ノ蒙テ親王ト号セラレ未タ宣下ナキ時ハ御老年ト  
云凡諸王ノ列ナリ亦御童体ト云凡宣下ヲ蒙ラセ玉フ  
御方ハ親王ト稱ズ五十六代清和天皇貞觀十八年十一  
月廿五日ニ皇子貞真一歳ニテ親王ノ宣旨ヲ蒙ラセ玉  
フ類ナリ併テ御童体ノ間ハ無品親王ニテ御束髮ノ時  
四品ニ叙セラレ亦當代后腹ノ親王ハ必三品自餘ハ四  
品ナリ都テ皇子御兄弟亦ハ無品ノ時既ニ五位ニ當ラ



世王フニ依テ叙品ノ時ハ何モ四品ニ叙セラル是ヲ有  
品親王ト称スルナリ或ハ御元服ノ後ニ叙品ノ例モア  
リ亦童体ノ親王並ニ無品親王ホハ任官ノ例ナレ有品  
親王任官ノ時ハ中務式部兵部ホノ卿彈正尹上野上總  
當陸ホノ太守ヲ兼帶シ玉フ例ナリ或ハ諸王ノ中一未  
賜源姓シテ人臣ノ列ニ不加御方ノ四位三位ホニ叙シ  
玉フ時更ニ親王ノ宣下ヲ蒙リ玉フ時ハ其本位ヲ不改  
シテ二位ノ諸王ハ二品親王三位ノ諸王ハ三品親王ホ  
ニ叙シ玉フナリ其外皇孫トノ親王宣下ヲ蒙ラセ玉フ  
ハ希有ノ儀ナレ且中古以來其例アリ八十四代順徳院  
第二ノ皇子忠成親王ノ御孫忠房親王ハ三世ノ皇子タ  
リト云且後宇多院ノ御猶子タルニ依テ花園院文保三

年無品親王ノ宣下ヲ蒙ラセ玉フ是遼通ノ事ナリ凡ソ  
當代ノ御連枝皇子ホハ一世トス御孫ハ二世トス曾孫  
ハ三世トス二世皇孫ノ親王宣下ヲ蒙ラセ玉フハ時々  
其例アリ三世ノ親王宣下ヲ蒙リ玉フハ希有ノ義ナリ亦  
當今ノ御連枝並ニ治世上皇ノ御子ノ寵賞他ニ異ナル  
親王ハ機家英雄家ノ大臣タル御方ヨリ上ニ着座アリ  
二世三世ノ親王ハ必シモ大臣ノ上ニ着座ノ義ナレ然  
氏時議ニ依テ希ニ其例アルヘキカ凡ソ親王ハ世事ニ  
預リ玉ハズ或ハ中務式部兵部卿ホニ任ゼラルト云  
且太南少南ホ其省務ヲ奉行シ亦ハ上野上總常陸太守  
ニ任ゼラル、時モ其國ノ各椽ホ國務ヲ奉行シテ親王  
ハ惟其官ヲ兼玉フノミナリ仍テ公事ニ臨テハ親王モ



太政大臣ノ下ニ著座ニ自余ノ時ハ大臣ノ上ニ著座セ  
ラル、ト云ノ説モアリ列座ニ上下ノ差別アリト云  
其ハ等同ナルヘシ令義解ホニモ太政大臣與親王御  
對顔亦ハ路中ニ逢王ヲ時互ニ御動座ナキノ由ヲ載  
リ其外近代親王家ト稱シ奉ルハ伏見常磐井有栖川ノ  
御家ヲ三親王ト稱ス伏見御家ハ後崇光院ヨリ以耒  
親ノ御家ナリ常磐井ハ八条御家ナレバ故式部卿ヨリ  
以耒和歌ヲ以テ繫トナサセラル有栖川御家ハ後西院  
ノ御裔ナリ

諸王 當今ノ御連枝亦ハ上皇ノ御子伯父叔父等ヒソ一  
世二世ノ皇子未ダ親王宣下ヲ蒙ラセヌハ亦源姓ヲ  
賜リテ人臣ニモ下リ玉ハカルヲ諸王ト稱シ奉リ

臣ニ擧リナシ宣下ヲ蒙リテ後ニ親王ト稱ズ亦人臣ニ  
下リテ源姓ヲ賜ル時ハ臣下ノ官職ヲ任ズルニ同ジ更  
ニ王臣ノ差別ナク官位ノ次第ニ列座セラル、者ナリ  
公卿 攝政關白太政大臣左右大臣内大臣准大臣ホハ皆  
公ト稱ズ中納言ハ從三位大納言ハ正三位ナリ然ニ羽  
林名家ノ中ニ於テ其量高官ニ任ズベキ人ヲ外進セ  
シメタク思召ル、時高官ノ關ナクシテ余議ナク大中  
納言ノ間ニ沈湍ノ時ハ晚達ヲ慰メ暫ク二位或ハ從一  
位ニモ叙セラル其時ハ位高ク官卑キニ依テ官ヲ辭シ  
申サレテ前官ノ大納言ホニナリ玉フヲ散一位散二位  
ホト稱シ奉ル是ヲモ卿ト稱ス凡ソ三位以上ヲ卿ト稱  
ズルナリ亦參議ハ其職大政官ニ居テ與公卿天下ノ事



ヲ参リ議ル職分ナルニ依テ四位参議ト云氏猶卿ト称スルナリ併テ天子ヨリ参議ヲ召ル、時ハ卿ト云テ四位ト称スルナリ

諸臣 正四位上ヨリ少初位下ニ至テ凡ソ官職アリテ朝廷ニ仕ル者ヲ皆諸臣ト称ズ異朝ノ例ハ三公九卿ニ大夫八十一元士アリテ天下ノ政ヲ執行フ本朝ニ准テ三公諸卿諸大夫侍ノ四等アリ棋家清花ノ大臣ヲ三公ノ列トシ名家羽林新家ノ中ニ三位以上ノ人ヲ知ト称シ諸大夫並ニ侍ヲ兼統シ諸臣ノ列トスルナリ  
注 清花三家ノ御方其外皇子皇孫ノ中ニ源姓ヲ賜リ人臣ニ下リ大臣大將ニ任ジ玉フ人人若クハ攝家ノ中ニ攝政關白ノ御先途ヲ遂玉ハ又御方ニモ大臣大將ヲ

經玉フ御方ヲ公達ト称スルナリ

殿上人 皇太子傳ハ省卿左右弁官職事侍從少納言亦其外ニモ四位侍臣ノ列ニテ昇殿ヲ聽ヒ天子ニ暱近ノ人皆殿上人ト申ベキカ總テ四位侍臣ノ称ト見タリ  
諸大夫 名家ノ中ニモ諸大夫家トテ其家家アリ其外源平重代ノ人人南家式家菅家江家ノ儒門並ニ太政官ノ外營陰ノ兩道伊勢系主亦皆諸大夫ノ列ナル由旧記ニ見タリ

侍 五位六位ノ下北面ヲ推テ侍ト称スル由后宇多院勅定ノ弘安礼節ニ見タリ其外本所ノ武者兩召仕所侍所並ニ親王大臣家ニ重代格勤ノ輩諸司ノ官人亦皆侍ノ列ナリ或ハ諸道ニ列リ一藝ヲ傳テ官位ニ升進スル人



人ヲ五位六位ノ侍ト称ズルノ通称ト見タリ

櫛家 近衛九条二条一条鷹司是ヲ五櫛家ト称シ奉リテ

鬘祖ハ天兒屋根命ノ御苗裔太織冠鎌足公ノ御末ナリ

五十六代清和天皇ハ文徳天皇第四ノ皇子ナリシカ天

守二年八月六七日文徳天皇崩御アリテ清和天皇末夕

御幼推ナルノ同忠仁公良房文徳帝ノ遺詔ヲ奉テ同年

十一月清和天皇ヲ御位ニ即奉リ自ラ攝政トナリ舊櫛

ノ御政ヲ兼行セラレシヨリ櫛家攝政ノ儀始マリテ今

ニ至マテ五櫛家相續テ攝關職ヲ以テ御家ノ先途トセ

ラル然ニ五櫛ノ御分忠仁公十一代ノ御裔法性寺用白

忠通公ノ長男六条左府基実公ヲ近衛ノ祖トス忠通公

ノ第九男月輪攝政兼実公ヲ九条ノ祖トス忠通公五代

ノ後胤稱念院攝政兼平公ヲ鷹司ノ祖トス月輪攝政兼

実公ノ孫普光園院良実公ヲ二条ノ祖トス良実公ノ御

弟圓明寺攝政実經公ヲ一条ノ祖トス以上ヲ五櫛家ト

申テ人臣ノ尊貴其比量アルベカラズ其中攝政用白ノ

御先途ヲ遂サセ玉フ御方ハ勿論ナリ其外モ御家香相

續ノ御方ハ大臣家ノ比スベキニアラス御廢子ノ先途

ヲ遂玉ハス御方ハ大臣家ニ不異ト云レ御父御見在ノ

間ハ竈賞自余ニ混ズベカラズ

清華 久我轉法輪三條西園寺徳大寺花山院大炊御門今

出川是ヲヒ清華ト称ス村上天皇ノ皇子具牟親王ノ御

裔久我相國雅実公ヲ久我ノ祖トス九条右府師輔公ノ

十一男關院大臣公季六代ノ後八条相國実行ヲ三條ノ



祖トス三条実行ノ御弟西園寺通季公ヲ西園寺ノ祖ト  
 ス通季公ノ御弟德大寺実能公ヲ德大寺ノ祖トス世三  
 条西園寺德大寺ノ三家ハ御兄弟ヨリ別ルト云正其源  
 因院太政大臣公季公ヨリ興ルニ依テ統テ因院ト称ス  
 京極關白師実公ノ二男花山院左府家忠公ヲ花山院ノ  
 祖トス花山院家忠公ノ御弟大炊御門大納言經実公ヲ  
 大炊御門ノ祖トス西園寺相國実兼公ノ三男菊亭兼季  
 公ヲ今出川ノ祖トス以上ノ七清花ヲ亦英雄ノ三家正  
 称ス有職四個ノ大事ヲ相傳ニテ太政大臣ヲ以テ先途  
 トシ玉フナリ

大臣家

西三条正親町中院是ヲ大臣家ト称ス後八条内  
 府実継公ノ三男推大納言公時ヲ西三条ノ祖トス西園

寺相國公經公ノ男山階左府实雄正親町ノ祖トス土  
 御門内府通親公ノ二男中院通方ヲ中院ノ祖トス是ハ  
 大臣ノ大將ヲ不兼シテ多クハ内大臣右大臣ホヲ以テ  
 先途トシ玉フ御家ナリ然レ時議ニ依リ其人ニ依テ并  
 進翼同アルベシ

羽林家

宇多源氏花山源氏因院家四条家ホノ末ノ御先  
 祖ヨリ近衛中少將ヲ任官ノ始トシ宰相中納言ヲ經テ  
 大納言ニ至リ大將ヲ兼帯シ武官ヲ兼テ宿衛禁軍ノ事  
 ヲ司リ多クハ正從二位ノ大納言ホヲ先途トセラル、  
 御家ヲ羽林家ト称ス飛鳥井庭田小倉橋本清水谷冷泉  
 松木澁野井ホノ類ナリ

俗家

日野勸修寺廣橋鳥丸甘露寺柳原兼室万里小路ホ



ノ御家ハ侍從少納言ヨリ職事并官ヲ經歷シテ廷尉佐  
助解由次官或ハ八省南ホヲ兼子宰相中納言ヨリ大納  
言亦ハ准大臣ニテニ升進ノ方モアリ

新家 羽林名家ノ外ニ近代公卿ノ御家ヨリ引分テ別ニ  
其家ヲ立ラル、樋口堀川平松藤谷野宮東松交野園池  
ホノ類凡テ五十餘家ニ及テ任官ノ升進様々ナリト云  
氏繁多ナルニ依テ是ヲ畧スルナリ

神祇家 六十五代花山院皇子彈正尹清仁親王ヨリ以未  
代代相續テ神祇伯ニ任ジ多ク少ク左右中將ヲ兼子亦ハ  
八省卿ナドヲモ帶レテ正二位ニテ升進セラル他家神  
祇伯ニ任ズルノ例ナキニ依テ神祇家トス  
和哥家 御堂用白道長ノ御裔五條三位俊成卿勅ヲ奉テ

千載集ヲ撰セラレシヨリ其子京極黃門定家卿亦新古  
今集ホヲ撰セラル續古今集續後撰集續拾遺集其外代  
代ノ和奇集多クハ州傳ヨリ出テ二條家ノ和哥ト稱ス  
今ノ冷泉其御ホトシテ和家ヲ繫トセラレ其外西三條  
飛鳥井殿モ和哥ノ御家ナリ

文章博士家 天穗日命ノ御裔阿波守菅原字庭ヲ高辻ノ  
祖トス高辻大藏卿為長ノ二男參議高長ヲ五條ノ祖ト  
ス五條參議長經ノ二男治部卿茂長ヲ東坊城ノ祖トス  
治部氏部刑部ホノ卿ヨリ宰相中納言ニ經歷シテ文章  
博士ニ任スルヲ規模トセラレナリ

明經道家 舟橋伏原ホノ御家明經道トメ代代大學頭ヲ  
兼帶シ十二經ノ義ヲ講セラルナリ



能書家 一条相國公經公ノ男左大將、実有テ清水谷ノ祖トシ右府俊家公ノ次男能登守基頼ヲ持明院ノ祖トス世兩家能書ノ御家ナリ

神木家 澁野井鷲尾藪内綾小路持明院四辻庭田五辻等ノ家家皆神木ヲ業トシ玉フナリ

和琴家 大炊御門四辻ノ兩家代代相傳テ和琴ヲ吹テ業トシ玉フナリ

琵琶家 伏見西園寺今出川園綾小路ホノ御家代代琵琶ヲ吹テ業トシ玉フナリ

箏家 四辻正親町綾小路藪内ホノ御家箏ヲ其家ニ傳テ業トシ玉フナリ

笛家 大炊御門綾小路徳大寺久我轉法輪三条甘露寺橋

本ノ家家相傳テ笛ヲ業トシ玉フナリ

笙家 花山院清水谷松木四条山科ホノ家ニ代代相傳テ是ヲ業トシ玉フナリ

箏策家 権中納言有資卿ノ男信有卿ヲ綾小路ノ祖トス代代相傳テ音ホニ達セラルト云臣別シテ箏策ヲ其家ノ業トシ玉フ由旧記ニ見タリ

蹴鞠 鞠ノ御家ハ飛鳥井難波冷泉綾小路ノ家家相傳テ業トシ玉フ難波飛鳥井ノ御先祖ニハ何レモ鞠ニ感應アリテ妙ヲ得玉スル由旧記ニ見タリ

装束家 凡御装束ノ事ハ天子御束帶ノ家菴ノ御服ヨリ

黄櫨染ノ御衣麩塵ノ御袍直衣小直衣大袖小袖表袴下裳指貫ホヨリ公家武家ニ至テ様様ノ式法アリ官ニ應



シ位ニ依テ一棟ナラズ種種ノ故実アリ轉法輪三条大  
炊御門高倉山科ホノ御家ニ相傳テ業トシ玉ノナリ

○女官大意

内侍司 女官十二司ノ中内侍司ヲ長トス何事ニ限ラズ  
奏請宣傳ニ至テハ内侍ノ所司ナリ殊ニ帝王御諒闇ノ  
時ハ前殿ニ出御ナキノ同内侍ヲ以テ事ヲ奏スルナリ  
清和帝貞觀元年正月朔日元正ノ御祝行ルベキ折柄ナ  
レ臣去年八月文德帝崩御アリテ天子御諒闇ノ同前殿  
ニ出御ナク朝賀ヲモ受玉ハサレノ同中務省ノ七耀御  
曆宮内省ノ氷様太宰府腹赤魚ホ内侍司ヲ以テ奏スル  
類ナリ  
○尚侍 二人アリ内侍司ノ長官ナリ凡ソ十二司ノ中

尚侍尚藏ヲ以テ長トスルニ依テ尚侍多クハ尚藏ヲ兼  
ルノ義アリ癸帝天平宝字六年ニ房前大臣ノ御女藤原  
宇比良古尚藏ニテ尚侍ヲ兼ル由續日本紀ニ見タリ相  
當從三位ナルニ依テ執柄家ノ御女亦ハ大臣納言ノ御  
女等モ其材アル御方ヲ撰ニテ任ジ至テ下ノ奏問ノ執  
達シヒノ勅宣ヲ下エ傳フルヲ其外女孀ノ器量ヲエラ  
三内外命婦ノ朝参禁内ノ作法ヲ兼知一ヲ司ルナリ○  
典侍四人アリ此司ノ次官ナリ相當ハ從四位ナリ奏請  
宣傳ノ事ハ尚侍ノ役ナルニ依テ典侍奉行セズ尚侍故  
障アリテ不勤時ハ典侍是ヲ執達ス其外ノ事ハ皆典侍  
是ヲ奉行スルナリ日野勸修寺其外ニモ宗徒ノ大中納  
言ホノ御女ヲ任セラルト見ル多クハ尚侍ニ轉任ノ



ノ故ナルベシ御乳母ナラバ諸太夫人ガヲモ任セラル  
其餘ハ公卿ノ女若クハ侍臣ノ女ヲモ任セラル、ノ由  
禁秘鈔ニ見タリ亦時代ニ依テ權典侍ヲ任スル一ナリ  
五十四代仁明帝嘉祥三年ニ雄河王女廣芳女王從四位  
下權典侍ニ任スル類ナリ○掌侍四人アリ吡司ノ判官  
ナリ相當從五位トス平家管家紀伊國司ノ女ノ可然人  
ヲ掌侍ニ任ズル由定友ノ女官志ニ見タレ凡近代ハ是  
ニ不限ト見タリ亦禁秘鈔ニハ掌侍六人ヲ任ス内四人  
ハ正掌侍二人ハ權掌侍ナリ但權掌侍ハ古ヨリ置玉ノ  
由ナリ四人ノ掌侍ノ中第一ノ上臈ヲ勾當内侍ト云フ  
今ノ長橋局是ナリ淨土宗日蓮宗ノ僧衆長老上人ノ號  
ヲ賜ル時ハ本寺ヨリ勾當内侍ニ申上テ内侍是ヲ獻聞

ニ達シ勅命ヲ奉テ假名書ニ相認メ是ヲ傳奏ニ達ス是  
近代ノ例ナリ○女嬬メグリ一百人アリ昔ハ吡司ト役ナルニ  
依テ百人ノ女嬬ヲ置ル近代ハ不然ト云リ往古ヨリ諸  
國ノ郡司縣令ノ女ノ容儀美ク材智アル者ノ十三以上  
凡歲以下ナルヲ選テ女嬬ニ召仕セ玉フ十二司皆女嬬  
アリト云凡内侍司ノ女嬬ヲ規模トスベシ  
裁司 女官十二司ノ中内侍司ニ次テハ裁司ヲ長トス禁  
内御手廻ノ器物ホヲ收玉フ庫藏ヲ奉行シテ御用ニ隨  
フテ出入スル役ナリ  
○尚藏シヤウサウ 一人アリ裁司ノ長官ナリ凡ソ十二司ノ中内  
侍ニ次テハ裁司ヲ長トスルニ依テ尚藏多クハ尚侍ヲ  
兼ルノ例アリ文德帝天安元年ニ尚侍菅原人數尚藏ヲ



兼ル由三代実録ニ見タリ相當正三位ナルニ依テ大臣  
 納言ノ女ノ材能アル方ヲエテ三ツ任セラル上古傳表  
 ノ室仲並ニ帝王内外ノ御印諸内閣所ノ符契其外珍室  
 綾羅錦繡絲帛御調度ホヲ庫藏ニ收テ出納シ並ニ御服  
 巾櫛ホヲ奉行スルヲ司ルナリ○典藏二人アリ藏司  
 ノ次官ナリ相當ハ從四位ナリ或ハ五位ノ女官ヲ任セ  
 ラル一人例モアリ職掌不多ニ依テ權典藏ヲ任セズ○  
 掌藏二人アリ此司ノ判官ナリ相當從六位ナリ或七位  
 ノ説モアリ諸臣ニ綵帛ホヲ賜ル時ニ掌藏是ヲ出入ス  
 ルヲ司ル其外別ノ職掌ナシ○女嬬十人アリ内侍司  
 ハ大役ナルニ依テ百人ヲ置玉ヲ藏司ハ役義少ニ依テ  
 十人ヲ置ルト見タリ

書司シヨシ禁内御手廻キナノミタマエ佛經論疏祖師ノ語録ブツキョウロノコト儒經ニヒキョウ三史ミシ文選モンセン  
 ノ類神書シノシヨ和漢ノ詩集文集ワカンノシシウシウ代代ノ記録トトノキ其外御學問ノ便  
 ニ用カセ玉ニヨウカセタマフノ書物紙墨筆玉机玉案琴瑟琵琶箏篳篥シテホ  
 事コト下シタ此司ノ支配ト見タリ  
 ○尚書シヨウシヨ一人アリ書司ノ長官ナリ役義ハ後官令ニ見  
 タリ相當正六位ナリ或ハ從六位ノ説モアリ大中納言  
 四位ノ侍臣ノ女等モ參ラルト見タリ亦從五位ノ女  
 官ヲ任セラル一人例モ旧記ニ見タリ○典書二人アリ  
 此司ノ次官ナリ尚書故障シヨウシヨコトアハ時ハ典書其役ヲ奉行ス  
 ルナリ相當從六位ナリ諸大夫ノ女等モ參ラルベシ○  
 女嬬六人アリ藏司シヨウシヨノ職分少キニ依テ女嬬ヲモウク  
 置サセラル以下ノ司モ此例ナリ



藥司 元日ニ主上ニ屠蘇酒ヲ献ル時尚茶御茶ヲ持テ茶  
 司ノ女孺ヲ召遣テ昇殿シ茶司ノ童女ニ先ニ御茶ヲ嘗  
 試サセテ後ニ供御ニ献ク次ニ神物白散度噴散ヲ献ク  
 三朝ニテ終ルナリ亦平生御茶ヲ召上ラル。時ハ典茶  
 頭御茶ヲ調合シテ茶司ニ傳テ茶司於承掌シテ是ヲ献  
 ラル。ト見タリキ  
 〇尚茶 一人アリ専ラ御茶献進ノ事ヲ奉行ス詳ニ後  
 官令ニ見タリ是茶司ノ長官ナリ相當ハ從六位ナレ氏  
 多クハ五位人任ゼラル。ノ例續日本後紀ホニ見タ  
 リ尤諸大夫侍臣ノサノ中ニテ其材ヲ撰出ラレ〇典茶  
 二人アリ茶司ノ次官ナリ相當ハ從六位ナリ諸道ノ女  
 孺ヲ參ラルベキカ〇女孺四人アリ役義定嘉ニ依テ女  
 孺ノ負數不多ト見タリ

兵司 帝王ノ御武具ハ左右兵庫寮ノ奉行スル度ナリ然  
 氏尋常御年廻ノ兵器御劔ホニ至テハ兵司ノ供奉スル  
 義ナリ役義不多ト云氏專要ノ職分ナリ  
 〇尚矢 一人アリ兵司ノ長官ナリ職掌ハ後官令ニ見  
 タリ相當ハ正七位ナリ肝尊ノ職ナレバ御暇近ノ侍臣  
 ノ女等參ラレベキカ〇典矢二人アリ兵司ノ次官ナリ  
 役義尚兵ニ同ジ尚矢故障アル時ハ典兵其事ヲ奉行ス  
 ルナリ相當ハ從六位ナリ〇女孺六人アリ  
 〇闈司 宮中ノ相逼ノ門ヲ闈ト云フ兵司ハ宮城ヨリ内ノ  
 諸門ノ鑰ヲ奉行シテ晨ニハ鑰ヲ奏請テ大舍人ヨリ監  
 物ニ渡シ夜ハ其鑰ヲ請取テ櫃ニ收ルニ依テ闈司ト云



又併テ諸門ノ鑰ハ圍司ノ奉行ナレ、氏大藏ノ鑰ニ至テハ監物ノ奉行スル處ナリ

○尚圍 圍司ノ長官ナリ相當ハ正六位トス或ハ正七

位ノ説モアリ職掌ハ後官令並ニ監物式ニ見タリ衛門

ノ所司ヲ宮門トシ兵衛ノ所司ヲ閤門トス宮門ノ兩門

其外諸門ノ鑰ヲ櫃ニ納テ尚圍是ヲ奉行ス朝夕ノ出納

ハ典圍ノ所司ナリ○典圍 此司ノ次官ナリ役義繁ニ

依テ四人ヲ置ル相當ハ正八位或ハ從八位ノ説モアリ

監物式ヲ考ルニ每朝諸司ノ鑰ヲ請者皆延政門ノ外ニ

候シテ開門ヲ待ツ候ニ至テ近衛ノ輩延政門ヲ開ク大

舎人圍司ニ就テ門ヲ叩フニ音ナリ其詞ニ圍司ト申ス

圍司聞テ誰ト問フ大舎人姓名ヲ申テ鑰給ラン夕ノ監

鑰給ラン夕ノ監

テ曰鑰給ラントテ監物誰典鑰誰門ヲ叩ユニ申ス勅

ニ由奏シメヨ圍司本座ニ復リ宣ノ趣ヲ云ノ監物即典

鑰大舎人ヲ引テ入テ候位ニ就テ監物奏シテ曰司司ノ

賜物下サニ鑰給ラント申ス勅ニ曰是ヲ取レト何ホモ

唯テ退夕典鑰大舎人ヲ引テ鑰櫃ノ下ニ依テ鑰ヲ取

出シテ大舎人ニ授ク大舎人請テ監物ニ授ク暮ニ諸門

ヲ閉テ鑰ヲ進ルモ亦其加クスルナリ如卍事皆尚圍典

圍ノ奉行スル處ナリ○夕燭十人アリ朝夕鑰ノ出納ニ

用事類ノ同十人ヲ置ルナリ

殿司 天子ノ乘輿鳳輦御專ノ蓋ヲ張リ其外毎夜御殿ノ

銅蓋土器ホニ油ヲ盛リ燈火ヲ批ク蠟燭ノ火ヲ立テ或



ハ寒氣ヲ防クタメニ十月ヨリ三月ニテ六個月ノ間殿  
中ノ間コトニ櫃鉢ニ火ヲ蓄ヘテ煖氣ヲ取リ皆世司ノ  
奉仕スル爰ナリ

○尚殿 一人アリ殿司ノ長官ナリ相當正六位ナリ或  
ハ從六位ノ説モアリ亦時ニ依テ五位ノ尊モ是ニ任ス  
ルト見ヘテ路真人氏子從五位下ニテ尚殿ニ任スル  
五十四代仁明帝永和十三年ノ傳ニ見タリ續日本後紀  
ニ詳ナリ○典殿 二人アリ世司ノ次官ナリ相當從七  
位ナリ或ハ從八位ノ説モアリ然レ從五位ノ女官典殿  
ニ任スルノ旧記ニ見タレハ從七位ノ説ヲ用ユヘキカ  
○女孺六人アリ役目不多ニ依テ六人ナリ

掃司 御殿ノ中掃除ノ事床机簾席ヲ拂拭テ布キ隙スル

ヲ奉行人役ナリ表向ノ掃除ハ掃部司ノ支配ナレハ  
掃司ノ下知ニ不及者ナリ

○尚掃 一人アリ掃司ノ長官ナリ相當從七位ナリ或  
説ニ正六位ト云リ右從五位ノ人尚掃ニ任スル例モ  
アレハ一際ニ不可論ト云レ職方鞋未ニ依テ從七位ノ  
説ヲ可用ニ信タリ役義詳ニ後宮令ニ見タリ○典掃ニ  
人アリ掃司ノ次官ナリ相當ハ從八位ナリ或ハ從七位  
ノ説モアリ併テ桓武帝延暦六年四月ニ武藏國足立郡  
ノ采女掌侍從四位下ニテ典掃ヲ兼ルノ例アレハ一向  
ニ官位ノ相當ヲ論ヒカタル職方後宮令ニ見タリ○女  
孺十人アリ御殿ノ中掃除ノ事多端ナルニ依テ女孺ノ  
員數多キト見タリ



水司 毎年正月十五日ニ赤小豆御粥並ニ白穀大豆小豆

栗栗柿小豆以上七種ノ御粥其外六月十二日解齋御

粥並ニ一切御移徒亦ハ御座ノ時ニ粥ヲ四方ニ賦甘世

ラ凡、時皆主水司ヨリ煮熟シテ献クレバ水司ノ女官

是ヲ奉行シ陪膳ノ采女是ヲ陪膳スルヲ司ル卅等ノ

重皆水司ノ奉行ナリ其外所司後官令ニ見タリ

尚水 一人アリ水司ノ長官ナリ相當ハ從七位ナリ

雅粥ヲ献進ノ時奉行ノ役ナリ。典水二人アリ卅司ノ

次官ナリ相當從八位トス。采女六人アリ膳部ノ下

司心ヲ依テ是ヲ陪膳采女ト云ナリ亦膳部采女ト云由

膳司 御膳ノ蓋肴朝夕ノ御食酒或ハ禮諸ノ餅菓菜其外

珍布菓子ホヲ献進スルヲ奉行ノ役ナリ平生ノ御膳

ニ至テハ内膳司ノ奉行ナレハ膳司ノ所支配ニアラス

惟膳司ノ奉行ハ饗飧ノ外ノ御菓子類ト見タリ

尚膳 一人アリ膳司ノ長官ナリ相當ハ正四位ナレ

氏稱徳帝ノ神護慶雲年中ニ從三位ノ尚膳アリ亦清和

帝ノ貞觀年中ニ從五位ノ尚膳アレハ其人ニ依テ位ノ

肥當一緊ナラス天子ノ御膳ハ内膳司ノ奉行ナレ氏御

膳ヲ献ル時ニハ尚膳是ヲ司テ於尔嘗ホヲ移ルナリ。

典膳二人アリ卅司ノ次官ナリ相當ハ從五位ナリ或ハ

正六位ノ説モアリ尚膳故障アル時ハ典膳代リテ其役

ヲ奉仕スルナリ。掌膳 四人アリ卅司ノ判官ナリ相

當ハ正八位ナリ然レ五位ノ女官モ是ヲ兼ルノ例曰記





ニ見タリ。○采女六十人アリ。世司ハ御膳ノ事ヲ奉行スルニ依テ役義煩キノ間采女ヲ多ク置ル皆是陪膳采女ニ裁ナリ。

酒司 諸節會正月其外平生献進ノ御酒並ニ一切各酒ホノ事ヲ奉行ノ職ナリ。是モ造酒司御酒ヲ醸スルヲ司レバ酒司ニ至テハ其献進ヲ改メ蓄ムルホノ事ヲ奉行スベシ。

○尚酒 一人アリ。酒司ノ長官ナリ。相當ハ正六位ナリ。五位ノ女官是ニ任ズルノ例續日本後紀ニ見タリ。從義詳ニ後宮令ニ見タリ。○典酒 二人アリ。酒司ノ次官ナリ。尚酒事故アル時ハ典酒代テ其事ヲ奉行ス。相當ハ從八位ナリ。

縫司 縫殿寮一切御服以下ノ事ヲ司ルト云。凡内内ノ後服ヲ裁縫。其外組物ホヲ組フ縫司ノ所司ナリ。並ニ縫女

采女ノ女切ヲエラニテ中務省ニ申シ。其外五位以上内外命婦ノ後宮工朝参ノ時世司退テ傳導スルヲ司ルナリ。職掌詳ニ後宮令ニ見タリ。

○尚縫 一人アリ。世司ノ長官ナリ。相當ハ正四位ナリ。其役重キニ依テ相當モ自餘ニ勝ル。清和帝貞觀十八年十一月ニ潔子女王尚縫ニ任ス。時正四位下ナル由三代実録ニ見タリ。○典縫 二人アリ。世司ノ次官ナリ。相當

ハ從五位ナリ。命婦ノ後宮工ノ朝参ノ事ヲ司ル尚縫ニ事故アル時ハ典縫是ヲ奉行スルナリ。○掌縫 四人アリ。世司ノ判官ナリ。職事多キニ依テ貞觀四人ヲ置ル。ナ



リ相當ハ從八位ナレハ五位ノ女官モ是ニ任スルト見  
 タリ。女孺百人アリ卅中ニ衣服裁縫ノ女孺アリト云  
 氏先ハ五位以上内外命婦ノ參見ヲ司ル役義ナルニ依  
 テ宮内駟使ノ用多キヲ以テ女孺百人ヲ置ト見タリ凡  
 十二司ノ中尚典掌ヲ職事ト云フ女孺系女ホヲ散事ト  
 云フ皆一個月ニ六日ノ御休ヲ賜リテ沐服トス其材能  
 フエラムノ義ハ五位以上ノ長上ノ例ニ准ス亦東官ニ  
 勤仕ノ官女其外嬪以上ニ奉仕スル女官モ材アル人ハ  
 番上ヨリ長上ノ例ニ准セラハナリ

上臈

大中納言等ノ御女久ク勤仕ノ勞ヲ重子テ二位三  
 位ニ升リ至テ典侍ヲ上臈ト号ス聽色ヲ服シテ御陪膳  
 ノ役ニ候セラレ假令典侍ナラスト云ハ執柄大臣家

御女亦ハ大中納言タリハ大臣ニ升進シ至テ御家ノ地  
 其外一位二位局ホハ皆上臈ノ稱アリ併テ聽色ヲ服セ  
 ルハ執柄大臣家ノ御女御孫ホニ限ルト見タリ大中  
 納言ノ御女モ典侍ハ是ヲ服セラル禁中ニテハ上臈院  
 中ニテハ大上臈氏稱スルカ亦禁中ハ一條ニ條ナト  
 申ス小路名ナキニ依テ上臈ノ中ノ上首ハ大納言ナド  
 ト稱スルト見タリ昔ハ撰家花族ノ御女ホ多クハ女御  
 更衣ホニ任ジテ天子ニ御瞻近アルニ依テ尋常ノ官仕  
 ハ不望ノ由旧記ニ見タリ中古以來ハ東宮親王ノ御乳  
 母院ノ女房達モ三位ニ任ジ至テ上臈ノ列ニ申  
 奉ルニキカ假令三位以上ナリハ聽色ニ至テハ其人ニ  
 依ルト見タリ但其家其人ニ依テ差別アルニシ



小上臈<sup>ラウ</sup> 二位三位ニテ升進シ玉ハ子氏大臣納言參議ホ  
 ノ御女ノ官仕シ玉フ 御方ヲ小上臈トス織物ヲモ聴著<sup>ガキキ</sup>  
 ス仙洞ニモ小上臈アリ大中納言ノ女トト參玉フ一條  
 二条十トノ小路名ヲ付セラレ 其外禁中ノ小上臈ハ名  
 家ノ大中納言宰相ホノ女或ハ孫トトモ參ラレ僧官ノ  
 女ハ時議ニ依ルベレ俗ノ時公達家トトノ僧トナリタ  
 ル人ノ女ハ小上臈トス一レ

中臈 四位ノ侍臣以下醫陰ノ兩道或ハ八幡ノ別當ノ女  
 其外各家未未ノ女ノ諸司ノ典掌トトニ任シ織物ヲ不  
 聽人ヲ中臈トスルナリ亦下臈ハ朝餉ノ内ニ渡ラズ  
 中臈ハ朝餉ノ縁ニ侍スルナリ凡ソ一切官仕ノ女房  
 多クハ皆中臈ノ品ナリ

下臈 諸道ノ侍並ニ賀茂日吉ノ社司ホノ女ノ大内ニ轉  
 ソテ左衛門右衛門左兵衛右兵衛ナトノ侍名ヲ名乗テ  
 國名ヲ不聽輩ヲ皆下臈ノ列トス但其中ノ年勞ノ積タ  
 ル人四月中酉日ノ賀茂祭使ヲ命婦トナリテ渡ルノ後  
 國名ヲ名シクルナリ夜御殿朝餉ノ内ニ出入セズ御服  
 フモ取ラス局ニ於テ紺紫ノ小袖帷子ホヲ着スル類皆  
 下臈ノ列ナルノ由旧記ニ見タリ

命婦<sup>ミヤメス</sup> 五位以上ノ官仕ノ内命婦トシ五位以上ノ妻ヲ外  
 命婦ト云フ古ヨリ其稱アリト見テ五位以上ノ命婦ナ  
 リ氏六位以下ノ官仕ヲ勤メバ正六位ノ官禄ヲ賜フヘ  
 キノ由ヲ光仁帝室龜三年ニ相定ラルノ由續日本紀  
 ニ見タリ異朝ノ例モ本朝ノ如ク内外命婦ノ品アリ九



嬪七世婦ヲ内命婦トシ御太夫ノ妻ヲ外命婦ト定ル  
ナリ然ハ命婦ノ称ニ至テハ和漢差別ナシ

藏人 節折藏人ハ采女ノ中ヨリ是ニ任ス桃花禪岡ノ御

説ヲ考ルニ六月晦日ノ夜御贖物奉ル荒世和世ノ御装

束二間ニ御屏風ヲ立テ御座ヲ敷テ御襪ノ座ノ如シ孫

店昆明池ノ障子ノ南ノ一間ニ屏風ヲ立テ燈臺ニ燈火

ヲ立ツ出御ノ程ハ消ス但南方ノ燈ヲ立ル庭中ニハ主

殿司幔幕ヲ引クト部竹ヲ庭中ノ席上ニ置ケハ節折命

婦其竹ヲ以テ御長ヲ取リ所所ノ寸法ヲ取ル神祇官ノ

官主其寸ノ竹ヲ取テ襪ヲ致ス襪終テ襪ヲ賜フ是節折

藏人ノ奉行ナリ或ハ節折命婦申スナリ

女官 臺所女官御湯殿女官アリ中原定友ノ説ヲ並考

ニ諸家ノ諸太夫人女ホ女官ヲ勤ラル但其家其人ニ依

テ升進スルニ遅速ノ不同アリ先ハ臺所女官ハ臺盤所

ノ御調度ヲ裝束スルヲ司ル然モ天子ノ供御ニ至テ

ハ奉仕スルトナシ順徳院ノ御時ヨリ以来多クハ臺所

カ自ヲ兼ルト見タリ亦五位以上ニ叙爵スルノ法ハ其

身奉公ノ勞ヲ積テ十年ナレバ其母官仕ノ勞ノ卅年ヲ

借テ母子凡テ四十年ノ勞ヲ重子テ五位ニ叙爵スルヲ

切杭ト申テ女官立身ノ例ナル旨旧記ニ見タリ亦御湯

殿女官ハ御湯殿ノ調度ヲ沙汰シ天子御浴ノ事ヲ奉行

ノ外ニ差ル役義ナシ

主殿 昔ハ主殿司六人アリ近代十二人ヲ置ル平生赤袴

ヲ着シテ宦仕ヲ務ム藏人拜賀ノ時ニ湯漬ヲ下サレ



時ニ主殿司給仕ヲ務ル一例ナリ尋常ニモ華嚴ヲ好ミ  
叙爵ノ時ニハ浅赤袴ヲ着シテ縫箔ノ小袖ヲ服スル例  
ナリ目テ下臈ノ中ニテハ神妙ノ職トスルナリ

得選 御園子所、女官ヲ得選ト云フ、夕ニ人ヲ任セラル然  
ニ采女ノ中ニ能ク髪ヲ結ノ人ヲエラミテ髪上采女ト  
号ス、其中ヨリ容儀材能アルヲエラミテ御厨子所、女官  
トス、仍テ得選ノ号アリ、固ヨリ髪上采女ノ中ヲ選テ此  
官ニ任スルノ同節會ノ時ニ御髪ヲ三ツニ分テ鈿ヲナス

得選是ヲ奉仕スト云リ、  
刀自 御膳宿刀自アリ、臺所刀自アリ、紫宸殿ノ西廂ニ御  
膳宿アリ、御膳ヲ納ル所ナリ、此所ヲ司ル女官ヲ御膳宿  
刀自ト云フ、御膳ヲ供ズル時、刀自御膳ヲ持テ鬼間ニ往

及ス小袖ノ表著ハ唐衣ナトヲ著スト見タリ、臺所刀自  
ハ臺所女官ノ類ナリ

采女 采ハ採拾ノ義ナリ、是ヲ采女ト名ケルハ諸國郡ノ  
大領少領ノ中ノ女ノ材能アルヲ采擇テ任ズルノ義ヲ  
以テ采女ト号ス、尚髪上采女ノ中ヨリ容儀ノサテ選得  
ニ依テ得選ト云フ類ナリ、古ヨリ五畿七道ノ國々ニテ  
郡ノ大領少領縣令ホヨリ諸國椽目ノ女ノ容儀美シク  
材能アル者ヲ采テ采女ニ任セラル、膳司水司ホニ屬ス  
レバ陪膳采女ト名ケ、髪ヲ能ク束ヌル人ハ髪上采女ト  
稱ス、其材能ニ依テ様々升進スルナリ、其中陪膳采女ハ  
天子御膳ノ給仕ヲ勤ルニ依テ親近ノ役ナリ、六十三代  
村上帝應和ノ比ヨリ以來陪膳ノ職典侍ニ移リテ采女



ノ職分有名無実ナル由旧記ニ見タリ凡ノ昔ハ采女四十七人ニ宮城ノ近地ヲ賜フ一人ノ畧田三町其毎月ノ糶ハ各白米四斗五外毎日二分テハ一外五合ナリ塩四合五勺ヲ賜フ亦樵丁守廬丁各一人アリ采女ノ下ニ奉仕スルナリ

東堅司

是ハ内侍司ノ被管ニテ行華ノ時ハ姫松ト云入

笑敷馬ニ乘テ供奉スルナリ先例ナルニ依テ三子ヲ用

ラル三子ハ天子ヲ守ルノ故事アルニ依テ一度ニ三子

ヲ産スル者アレハ是ヲ奏同ス即乳母ノ料御杖持ナド

入下サル成長ノ後ニハ除位ノ時申文ヲ献ケテ五位ヲ

給ル其時紀朝臣季明ト名ツク古ヨリノ例ナリ此ハ東

豎子トナルナリ其外一度ニ二男一女或ハ二女一男或

ハ二男二女ホヲ産スル時ニ是ヲ奏同スレバ御杖持テ

下サレノ例續日本紀以下ノ絶録ニ見タリ

雑任

諸家ノ諸太夫ノ女並ニ五位六位ノ侍ノ女ノ容貌

美麗ニシ種姓宜キ者雜仕トナリ細小ノ御用事ヲ給仕

ス左馬頭義朝ノ妾常磐ハ昔時九條院ノ雜仕ナリト云

フ類ナリ

上童

女孺ヨリ上品ノ役ナリ禁中院宮執柄家ナドニ皆

上童アリ女官志ニ上童ハ國名亦有寄名氏名ツクル由

ヲ記セリ亦上童ヨリ下ニ下仕ト云物アリ大掾上童ノ

役義ニ似タルカ

女孺

諸司ノ駈使ヲ勤ル役ナリ別ノ子細ナレ侍ノ女ノ

種姓宜キ者ヲ女孺ニ任ズ多クハ乃前ノ中ヨリ女孺ヲ



仕立テ出ス人由後小松院ノ時代ニ相定ル由旧記ニ見  
 タリ昔ハ御所中人掃除掃油ホノ役ヲ奉仕シ其外諸司  
 ノ用事ニ馳使スト見タリ平生ハ小袖ニ唐衣ホヲ着ス  
 ト見タリ中古以來サ孺次第ニ赤進シテ御殿ノ御調度  
 一手ヲ触其外御格子ノ出明ナドヲ奉任スル一畧儀ナ  
 ル由旧記ニ見タリ

院廳 廳ハ一ツリゴトヤト訓ズ院中ニテ政務ヲ行ル処  
 又院廳ト云フ昔ハ縱々ナリ七十三代堀河院ノ御宇ニ  
 白河法皇自ラ天下ノ政務ヲ行セ玉イシヨリ諸國ノ謁  
 辭一テ王院廳ノ申文ヲ重シズル一勅宣ノ如シト云リ  
 院廳ノ統領ヲ大別當ト稱ス清和天皇ノ大納言或ハ  
 中納言タル人大別當ニ任ジテ院中ノ政務ヲ奉行セ

止或ハ二三位ノ參議ホ大別當ニ補セラレノ由ヲモ  
 詔セリ院廳ノ長官ヲ執事ト云フ名家ノ大中納言參  
 議ホノ兼官ナリ或ハ鹿園院義滿公大臣ノ大將ニテ院  
 大別當執事ノ兩職ヲ兼玉又例アレハ執事先重職トス  
 ベレ但亦時ニ依テ用倚アルベキカ。院廳ノ次官ヲ年  
 頭ト云フ名家ノ殿上人是ヲ兼ルナリ。院廳ノ判官ヲ  
 判官代ト云フ名家ノ四位五位ノ諸太夫是ニ任ズ院廳  
 大小ノ雜務ヲ奉行シ定案ヲ考ヘ發奏ヲ切ル役ナリ是  
 ヲ判官ト云フ判官代ト云ハ禁裡院中ノ官名同キ  
 時ハ混亂スルニ依テ代字ヲ加テ院中ノ官ナルヲ分  
 ツナリ亦侍ノ中ニモ有年勞人ハ是ニ任ズルト見テ  
 皇向宮大進光遠ハ藏人所ノ雜色ヨリ後白河院廳ノ判



官代トナル類ナリ。院廳ノ主典ヲ主典代ト名ク院宣  
其外院中ノ諸事ヲ執筆ノ役ナリ諸大夫侍ノ丈材アル  
者並ニ廳官ノ年勞ヲ重ヌル輩是ニ補スルナリ

廳官 院中大小ノ雜事ヲ記録スル處ヲ廳官ト云フ假令  
ハ太政官ノ外記局ノ例ニ倂タリ卅中ニ公文院掌ノ西  
役アリ廳官ノ雜務ヲ記録シ院中大小ノ義ヲ支配スル  
ナリ公文ハ太政官ノ史生ノ若ク院掌ハ太政官ノ官掌  
ニ倂タリ

院殿上人 諸臣ノ中ヒテ三位以上ハ公卿ノ列ナリ三位  
以下ノ位ニテ四位五位ノ時ニ昇殿ヲ聽レテ禁中ニ參ス  
ル人ヲ殿上人ト云フ院殿上人モ禁中ト差別ナリ四位  
五位ニ段アリ多クハ諸大夫ヨリ殿上人トナルナリ

院藏人 禁中ノ職事ハ藏人頭五位藏人六位藏人非藏人  
アリ院中ニハ五位藏人二人六位藏人二人非藏人ホラ  
置ルナリ五位藏人ハ五位殿上ノ中ヨリ材能アル人ヲ  
撰テ補セラル六位藏人ハ諸大夫ノ中ノ器量アル人ヲ  
補スルナリ非藏人ハ重代諸大夫ノ中ノ未タ藏人ニ不  
補ニテ先ツ昇殿ヲヲ聽サル輩ヲ非藏人ト云フ院中  
ノ要籍駈使ノ事ヲ勤ルナリ

上下北面 昔時ハ北面ノ勢ナレ七十三代堀河院未長年  
中白河上皇始テ院中ニ北面ヲ置王ヲ以来ノ例ナリ名  
家ノ諸大夫四位五位ノ殿上人ナド北面ニ候スルナリ  
熱田太官司ノ男九郎範雅後白河院ノ上北面トナリ備  
磨守仲經後宇多院ノ上北面トナル類ナリ下北面ハ源



平ノ侍是ニ補ス多クハ禁中ノ滝口藏宮ハ帶解ナド院  
参シテ武者所ニ候ニ下北面ニ列ルナリ

雜色 禁中藏人兩ノ雜色ニ侶タリ地下ノ侍院ノ藏人兩  
ノ雜色ニ補シテ御使ノ役ナドヲ奉仕スルナリ但馬守

子國輔後三条院ノ藏人兩雜色ニ補スル類ナリ  
召次所 院宮和哥ノ御會ノ時ニ御硯水ナド給仕ノタメ

ニ御壺ノ中ニ候ス其外御使ホヲ勤ル由ナリ  
別納所 禁中ノ内藏寮高書寮ホニ侶テ金銀珠玉其外綾

羅錦繡ホ一切練彰ヲ納ル所ナリ世所奉行ノ役ヲ直ニ  
別納所ト称スルナラン亦別當アリト見タリ

袷服所 院ノ御服並ニ一切ノ御裝束ノ物ヲ納ル所ヲ御  
服所ト号ス禁中ノ内藏寮縫殿寮ニ侶タリ世所奉行

ノ職ヲ御服所別當ト称スルナリ  
御厨子所 亦ハ潜所ト云フ禁中ノ御厨子所ニ同ク朝夕

御膳ノ具並ニ御酒殺種種ノ菓子ホヲ納ル所ナリ此所  
ヲ司ル奉行ヲ預ト云フ七十五代崇徳院ノ時主永正資

盛院御厨子所預トナル類ナリ  
進物所 諸國並ニ宮宮方ヨリ御献進ノ物ヲ收置ク所ナ

リ是亦預アリテ支配スル由ナリ  
文殿 院中ニ於テ諸國ノ訃訃ヲ次断シ玉フ所ナレバ禁

中ノ記録所ニ侶タリ其長官ヲ雜訃衆ト云フ殿上ノ四  
位ホ是ニ任セラル其次官ヲ職事ト云フ五位六位ノ諸

太夫ノ所任ナリ其主典ヲ寄人ト云フ地下ノ五位六位  
ノ侍ホノ所任ナリ



武者所 源平ノ侍其外重代武勇ノ輩院人下北面ニ候ス  
ル者ノ伺候スル所ナリ非常ノ警固ヲ司ルニ依テ武者  
所ノ名アリト見タリ

御隨身所 常ニ院中ニ候シ御幸ノ時ハ供奉ヲ勤ル官人  
ノ伺候ノ所ナルニ依テ御隨身所ト号ス此所ニ將曹府  
生番長近衛ホアリ大抵禁中近衛府ノ下ニ置ル、將曹  
府主番長ホニ相侶タリ左右將曹二人アリ相當從七位  
上ナリ帶劔供奉ノ役ナリ近衛ノ舞人共人舎人ホ是ニ  
任ズルナリ左右府主二人アリ判任ノ官ナリ番長多ク  
是ニ轉ズルト見タリ左右番長二人アリ近衛ノ中ニ  
年勞アル者は任ズルナリ左右近衛六人アリ時ニ依  
テ八人ヲモ置玉フ、兵杖ヲ帶シ歩ニテ供奉スルナリ後

宇多院ノ御宇ニ定玉ノ弘安禮節ニ所載ノ僮僕員數ノ  
事ヲ考ルニ太上天皇ノ御隨身ハ將曹府生番長合テ六  
人ハ騎馬ニテ供奉ス近衛八人ハ徒ニテ供奉スト云リ  
亦攝政兩白ノ御方ハ府生番長合テ四人ハ騎馬ニテ供  
奉ス近衛六人ハ徒ニテ供奉ス其外大臣ノ大將ハ御隨  
身合テ八人參議ハ六人中將ハ四人少將ハ二人衛府者  
ハ四人衛府佐ハ二人ヲ召使フノ由ヲ記セリ

御厩 院ノ乘車ノ牛馬ヲ畜置テ御幸ノ御役ニ達スルナ  
リ其前ヲ司ル棟梁ヲ御厩別當ト稱ス諸家重代武勇ノ  
輩是ニ補スルナリ其長官ヲ舎人ト云フ次官ヲ居飼ト  
云フ馬ヲ飼フヲ奉行ス判官ヲ牛飼ト云フ乘車ヲ駕ス  
ル牛ヲ奉行ス生典ヲ車副ト云フ御車人左右ニ隨從ス



ルノ由弘安禮節ニ見タリ

○僧官太意

御門跡 五十九代宇多天皇寛平八年八月ニ光孝天皇ノ御願ニ依テ大内山ニ仁和寺ヲ草創アリ御室ト号ス寛平法皇ノ御廟基アルニ依テ御門跡ト申ス意ニテ御門跡ト称ス門跡ノ号是ヨリ始ル然ニ皇子或ハ帝王ノ御連枝ホノ御節ヲ下シ法門ニ入世玉イテ親玉宣下ヲ蒙リ玉フヲ法親王ト申ス御位モ常ノ親王ニ同ク四品ヨリ一品ニ下ノ品アリ此法親王ノ御在住ノ寺ハ皆官門跡ト称ス其中仁和寺ハ御門跡ノ廟基ニテ寛平法皇ノ御寺ナレバ自餘ニ不可混テ以テ僧務ト号シ官門跡ト上首ニテ必一品親王ナリ自餘ノ官門跡ハ二品法親王

ホ御住職アリ其外樓家ノ公達ホ御冠髪アリテ釋門ニ入玉フヲ棋家門跡トシ亦清花ノ公達ナレバ清花門跡トド、称バルナリ其大際ヲ云ハ御室仁和寺嵯峨人大覺寺ハ官門跡小野ノ隨心院醍醐ノ三室院ハ樓家門跡此科ノ勸修寺ハ清花門跡ナリ以上ノ五個寺ハ真言宗ニテ東寺ノ門跡ナリ○小原ノ圓融院粟田口ノ普蓮院大佛ノ妙法院竹内ノ曼珠院ハ官門跡東叡山ノ毘沙門堂ハ清花門跡ニテ以上ノ五個寺ハ天台宗其中圓融院普蓮院妙法院ハ山門ノ座主ヲ兼玉フニ依テ叡山ノ三門跡ト云フ洛東ノ聖護院岩倉ノ実相院ハ官門跡三井寺ノ圓滿院ハ公方門跡以上ノ三個寺ハ天台宗ニテ三井寺ノ長吏ヲ係玉フナリ南都ノ一乘院ハ公方門跡同



大業<sup>ダイヤク</sup>流ハ榎家門跡以上ノ二個寺ヲ南都ノ西門ト云フ  
 法相宗ヲ兼玉ノ東山ノ智恩院ハ宮門跡ニテ淨土宗ト  
 リ東西ノ本願寺ハ清花門跡ニ唯セラルル宮門跡ハ二  
 品<sup>ニホ</sup>蓮<sup>レン</sup>蓮<sup>レン</sup>ニハ一品ノ例モアルニ榎家清花ノ門跡ハ大  
 僧正ニ任ジ玉ノナリ正副寺<sup>テウジ</sup>天<sup>テン</sup>宗<sup>ソウ</sup>其<sup>キ</sup>中<sup>チュウ</sup>高<sup>カウ</sup>麗<sup>レイ</sup>  
 諸宗<sup>シヨソウ</sup>人皇<sup>ニョウ</sup>ニ四代推古<sup>スヒコ</sup>天皇<sup>テウ</sup>ニ三年正月高麗ノ僧惠<sup>ヱ</sup>薩<sup>サク</sup>本  
 朝ニ来テ始テ之論宗ヲ宏メ河内國井上寺ヲ建立ス是  
 三論宗ノ興ナリ○四十九代光仁天皇ノ御宇良辨僧正  
 渡唐ノ時唐ノ杜順<sup>トシユン</sup>和尚ニ逢テ華嚴宗ノ本意ヲ傳テ  
 朝ノ南都ノ東大寺ニ於テ是ヲ修ス未<sup>ミ</sup>宏<sup>コウ</sup>シテ室<sup>シツ</sup>龜<sup>クイ</sup>四年  
 十一月十六日ニ良辨僧正遷化ノ後同八年ニ慈訓僧正  
 世宗<sup>セソウ</sup>ヲ南都ニ興セリ○唐ノ玄奘<sup>ゲンソウ</sup>三藏<sup>サンザウ</sup>天竺<sup>テンシク</sup>ヨリ法相宗

ヲ傳テ中國ニ是ヲ宏ム本朝孝德帝白雉四年定惠和尚  
 八唐ノ玄奘ニ逢テ法相宗ヲ傳リ四十八代天武天皇白鳳  
 七年ニ般朝<sup>ハンチョウ</sup>ニ和州多武峯ヲ建立ス其宗未<sup>ミ</sup>々<sup>ゾ</sup>天下ニ傳  
 テス四十四代元正帝靈龜二年玄昉僧正勅ヲ奉テ入唐  
 ニ泗州ノ智周大師ノ門人トナリ亦法相宗ヲ傳ハリ至  
 武天皇天<sup>テン</sup>年<sup>ネン</sup>七年遣唐使多治美<sup>タヂミ</sup>宏成<sup>コウセイ</sup>ニ伴テ般朝ニ本  
 朝ニ宏ム是法相宗ノ始ナリ○五十七代桓武天皇延暦元  
 二年七月傳教大師與菅原清公同船ニテ求法ノタメニ  
 入唐ニ翌年六月ニ天台宗ヲ傳テ般朝ニ高雄ニ於テ灌  
 頂ヲ執行ス是天台宗ノ始ナリ世ニ論花嚴法相天台ノ  
 四宗ヲ四家大乗ト申スナリ○五十七代桓武天皇延暦元  
 三年弘法大師與藤原葛野麿同船ニテ入唐ニ般朝ノ後



嵯峨天皇弘仁七年六月紀州高野山金剛峯寺ヲ建立シ  
 テ真言宗ヲ行セラルル此時勅シテ真言宗ヲ以テ諸宗ノ  
 第一ト定ラルル是真言宗ノ始ナリ○四十六代孝謙天皇  
 天平勝宝年中鑿真和尚入唐シ大小ニ兼ノ本意ヲ極テ  
 律宗ノ旨ヲ明ニシ敏朝ノ後ニ本朝ニ宏ム東大寺下野  
 茶師寺鑑茶觀音寺ホニ戒壇ヲ建立シ此戒律ヲ不受者  
 ハ僧籍ニ加ラズ然レモ世宗有名無実ニナリテ守戒ノ人  
 ナシ其後南都ノ恩園上人童疏ヲ明ラメテ持戒ノ師ト  
 ナリ北京ノ裁禪上人ハ入宋シテ律宗ノ本旨ヲ傳テ是  
 ヲ本朝ニ宏レレ其法再興シテ尚未完盛ナラズ八十三  
 代土御門院正治元年俊務入唐シ順德院建曆元年  
 朝シテ律宗ヲ泉涌寺ニ弘ム是律宗ノ始ナリ○禪宗ハ

西域ノ達磨大師梁ノ武帝ノ時ニ中國ニ來テ其宗ヲ傳  
 ト云レ江南ノ人は是ヲ信仰セズ亦江ヲ渡リテ此朝ニ來  
 リ嵩山ニ入テ面壁九年ノ後慧可其宗ヲ傳テ是ヨリ四  
 傳シテ弘忍禪師其法ヲ嗣ク南北ノ二宗相分ル本朝傳  
 教慈覺ノ兩大師地宗ヲ傳テ敏朝ニ慈覺ニ傳ノ門人ニ  
 安然和尚北宗ノ義ヲ明ニシ本朝ニ弘ム八十三代土御  
 門院ノ御宇榮西僧正黃菴ノ流ヲ汲テ其宗ヲ傳テ建仁  
 元年洛東建仁寺ヲ建立ス亦聖一國師入唐ノ時不續ノ  
 下虎丘ノ流無準禪師ニ禪宗ヲ繼テ敏朝ノ後是ヲ本朝  
 ニ宏ム四条院延應元年九条左府道家公ノ御願トシテ  
 惠日山東福寺ヲ建立ス是禪宗ノ始ナリ○八十三代土  
 御門院義元年中源空上人淨土宗ヲ宏ム是當時真宗



二敎依キセハ同元年二月廿八日佐州ヲ禪シ流セテル順德院建曆元年十一月廿九日敎免ヲ蒙テ敎朝ニ洛東智恩院大谷寺ヲ建立ス是淨土宗ノ始ナリ。八十五代後堀河院貞應元年二月蓮上人房州ニ誕生シ成長ノ後大采妙典ニ敎依シテテ日蓮宗ヲ弘メ後宇多院弘安五年十月十三日武州ニ於テ遷化ス是日蓮宗ノ始ナリ。○後堀河院嘉祿二年親鸞上人下野國芳賀野ニ於テ高田ヲ建立シテ專修寺ト号ス是一向宗ノ始ナリ。○山聖人遷化ノ後十一年ヲ隔テ文永九年始テ本願寺ト称ス百五代後桓原院ノ御宇ニ門跡ノ号ヲ賜ル正親町院天正十九年ニ六条本願寺ヲ建立アリ諸宗ノ開基大緊如世ト身外然ニ天台真言ノ兩宗ハ桓武嵯峨兩帝ノ御宇ヨリ既ニ僧

官アリ禪宗ハ尊氏將軍ノ敎依ニテ夢窓國師諸寺ヲ建立セラレレヨリ代代公方家ノ御崇敬アルヲ以テテ權貴他宗ニ異ナリ南禪寺ヲ五山ノ上ニ位スルニ依テ長老モ五山長老ヨリ尊ムベシ其外天童寺相國寺建仁寺東福寺萬壽寺ヲ五山トス。爾東ノ御支配ナリ其官ハ藏主ニ首座單寮西堂一テ私官ナリ東堂ヲ和尚長老ト称ス勅任ニテ紫衣ヲ賜ル是ハ南禪寺僧錄ニ申シ爾東ノ御推舉ニテ勅任アレバ難成義ナリ亦五山ノ下ノ十刹ハ西堂單寮ノ住職ナリ亦大德寺ハ後醍醐帝ノ勅願ニテ大塔國師ノ開基ナリ妙心寺ハ花園院ノ勅願ニテ開山禪師ノ開基ナリ兩寺ハ勅願寺ナルニ依テ升進ナリヤスキトナリ藏主首座單寮ト升進シ西堂ナク出世



ヲ遂ク單察ヲ黒衣長老ト云フ出世ノ僧ハ紫衣ナリ亦  
曹洞宗ノ本寺ハ惣持寺永平寺ナリ是ハ拳狀ヲ取テ木  
下道正ヨリ職事ニ申テ出世ヲ遂ク惣本寺ハ紫衣其外  
未本寺ハ紫衣ヲ不著ナリ

菩薩 卅九代天智天皇八年ニ釋ノ行基和泉國ニ誕生シ  
十五ノ時剃髮シテ法門ニ入レヨリ一生ノ間諸國ニ橋  
ヲ懸ケ堤ヲツキ畿内ニ寺ヲ建立スルヲ四十九個寺遂  
ニ孝謙帝天平勝宝元年二月二日菅原寺ニテ入滅ス行  
年八十七歳ナリ其行徳普ク人ヲ救フニ依テ謚シテ行  
基菩薩ノ号ヲ賜フ其後九十三代伏見院正安二年閏七  
月三日大法師嚴尊ニ興正菩薩ノ号ヲ賜フ類ナリ其僧  
ノ徳菩薩ノ行ニ合フノ義ナルベシ

國師 沙門ノ道徳文材兼備リテ帝王ノ師トナリ玉フ人

遷化ノ後ニ國師ノ号ヲ贈リ賜ル至一國師夢家國師亦  
ノ類ナリ存命ノ間ニ國師ノ号ヲ賜ルハ希ナルヲナリ

大師 五十六代清和帝貞觀八年七月十三日最澄ニ傳教

大師同月同日圓仁ニ慈覺大師六十一代醍醐帝延喜卅一

年七月廿七日空海ニ弘法大師同帝延長五年十二月廿

七日圓珍ニ智證大師近代南光坊大僧正ヲ慈眼大師ト

謚号ヲ賜フ類ナリ

僧正 僧正僧都律師是ヲ僧總ト云フ僧中ノ非違ヲ改正

ス官ナリ昔ハ僧尼ニ僧官ノ義ナシ卅四代推古天皇卅

二年ニ勅シテ曰頃僧ノ俗ヲ執テ其祖父ヲ毆者アリト

云リ若世ニ道人法ヲ犯シテ無禮ヲ行ハハ何ソ倍入ヲ



教化スルノ益アラシ然ハ今ヨリ僧正僧都ヲ任セテ僧  
尼ノ不法ヲ檢校スベシトテ僧觀勤ヲ僧正僧德積ヲ僧  
都ニ任ジ玉フヨリ僧官ノ義始マレリ大僧正ハ二位大  
納言ニ准ズ聖武帝天平十七年正月行基ヲ大僧正ニ任  
ス椹家清花ノ門跡其外尊勝院若王子ナトハ是ニ任セ  
ラル、ナリ正僧正ハ二位中納言ニ准ズ權僧正ハ三位  
參議ニ准ズ清和帝貞觀七年九月茶師寺ノ壹演權僧正  
ニ任ズ洛東ノ智積院和州ノ小池坊ハ新義ノ兩本寺タ  
ルニ依テ權僧正ニ任セラル、ナリ但僧官ノ位階ハ桓  
武帝嵯峨帝清和帝ホノ時度度改メリテ一決セズ爰ニ  
前記ハ釈家官班記ニ前載ノ後醍醐帝建武二年ノ勅書  
ハ趣ナリ僧位ヲ云ハ僧正ハ法印大和尚位ニ當ルナリ

僧都 僧經ノ一ナリ僧中ノ非違ヲ檢校シ諸大寺ノ雜務  
ヲ勅知スル一僧正ニ同ジ其始ハ推古天皇廿二年四月  
僧正ヲ置ル時僧都ヲ並置ル德積始テ僧都ニ任ズ然而  
僧都ハ四位殿上人ニ唯スル由後宇多院ノ勅定ナリ亦  
延喜式位記篇ニハ僧都ヲ三位ニ准ズト云テ賻物ニ至  
テハ五位ニ准ズト云リ然バ時ニ依テ相當クシノ筈ア  
リテ一決シカタシ大僧都ハ天武帝白鳳二年ニ恩城寺  
ノ道昭ヲ大僧都トス權大僧都ハ文德帝ノ御宇真言ヲ  
權大僧都ニ任スウ僧都ハ天武帝白鳳二年興福寺ノ義  
成ヲウ僧都トス權ウ僧都ハ清和帝貞觀年中ニ最教ヲ  
權ウ僧都トスル類ナリ僧位ヲ云バ僧都ハ法眼經高位  
ニ當ルナリ

本朝の僧位考卷七



律師

僧經ノツナリ職分大寮僧都ニ同<sub>レ</sub>律師ハ五位ニ

准<sub>ル</sub>ナルナリ正律師ハ文武天皇元年二月ニ南都元興寺

ノ僧<sub>ニ</sub>善性ヲ正律師トス權律師ハ清和帝貞觀元年ニ慧

運ヲ權律師トス僧位ヲ云ハ律師ハ法橋上人位ニ當ル

ナリ以上ノ僧正僧都律師ヲ僧經ト云フ公卿ノ官ニ准

セバ卿殿上人諸大夫ノ三等ニ偕タリ

威儀師 僧官ノ次第ヲ云ハ從儀師ノ上ニテ大寮僧都ニ

同<sub>ジ</sub>多クハ是ヨリ律師ニ轉スルカ後宇多院ノ御宇ニ

五位北面ニ准セラレ由弘安禮節ニ見タリ僧位ヲ云

威儀師ハ傳燈大法師位ニ當ルナリ

凡僧 或人説ニ未補僧經入ノ碩学修行ノ譽アリテ必僧

經ニ補スベキ僧ヲ凡僧ト称スト云々此説非ナリ凡僧

ハ僧官ニテ別當是ヲ兼帶ノ由ナリ東寺ニ卅僧官アリ

ト見タリ後宇多院ノ禮節ニ凡僧或ハ殿上ノ六位ニ准

レ或ハ地下ノ五位諸大夫ニ准ズ凡僧云リ僧位ヲ云バ

凡僧ハ傳燈大法師位ニ當ルナリ

從儀師 僧官ナリ八人アリ醍醐帝ノ時從儀師ヲ四位ニ

准セラレト云凡弘安禮節ニ改テ六位ニ准ジ玉ノ僧

位ヲ云バ從儀師ハ傳燈法師位ニ當ルナリ

法印大和尚位 僧位ナリ三位參議ニ准ス僧正是ニ叙ス

清和帝貞觀六年ニ大僧都傳燈大法師位真雅ヲ以テ法

印大和尚位ニ補スト云リ

法眼和尚位 僧位ナリ四位殿上人ニ准ズ僧都是ニ叙ス

貞觀六年ニ律師傳燈大法師位慧達ヲ以テ法眼和尚位

ニ補スト云リ



二叙レク僧都ニ補スト云リ

法橋上人位 僧位ナリ五位ニ准ズ醍醐帝ノ時ニ法橋上人位ヲ五位ニ准スト云氏傳物ニ至テハ從五位ニ准セラレ、由延喜式ニ見タリ先ハ律師ヲ是ニ叙ス貞觀六年ニ傳燈大法師位明哲ヲ法橋上人位ニ叙レ律師ニ補スト云リ

傳燈大法師位 僧位ナリ醍醐帝ノ時ニハ三位ニ准セラレ、ト云氏弘安禮節ノ所載ヲ考レバ傳燈大法師位ヲ律師ノ位トスルニ依テ五位北面ニ當ルベシ清和帝天安二年ニ東大寺ノ傳燈大法師位安圓ヲ以テ内供奉十禪師ニ補スル由ヲ載タリ

傳燈法師位 僧位ナリ醍醐帝ノ時ニハ四位ニ准セラレト云氏後宇多院ノ時ニ改テ六位ニ准レ玉ヲ由弘安禮節ニ見タリ從儀師是ニ叙スルナリ

傳燈滿位 僧位ナリ桓武帝延暦十七年ニ五位ニ准セラレ醍醐帝ノ時亦傳燈滿位修行位誦持位ヲ以テ同ク五位ニ准レ玉ヲト云氏後宇多院ノ僧位改正ノ例ニ准セハ從六位ホニ相當スベキカ清和帝貞觀年中ニ傳燈滿位ノ三澄アリ亦法印大和尚以下傳燈滿位以上ハ勅授ノ位ト見タリ

傳燈住位 僧位ナリ桓武帝醍醐帝ノ兩時何モ傳燈住位ヲ以テ六位ニ准セラレ後宇多院ノ時僧位改正ノ礼ニ准セバ七位ニ相當スベキカ住位入位ノ兩階ハ勅授ニ及ズ直ニ僧經ノ判授ナリ



傳燈入位 僧位ナリ祖或帝醍醐帝兩時ハ分位ヲ以テ七位ニ唯セラル後宇多院ノ時ハ例ニ准セバ八位ノ相當ナラニカ大抵位ノ高下ハ時ニ依テサテ異同アルハ一法ニカタク亦無位ノ僧始テ位階ヲ受ルニ依テ八位ノ名アリ見タリ是亦僧經ノ例按ナリ

法務 僧ノ官位ニアラス職掌ナリ僧正僧都律師ノ兼帶ニテ彼等ハ位ハ四位殿上人ニ准ズルナリ已講 有職ノ一ナリ亦ハ探題ト名ク初先少擬講ニ補シ其材ヲ試テ後ニ已講ニ補セラル論議ノ時ニ題ヲ出ス役ナリ南都山門東寺ホニ此僧官アリ七下ハ代ニ条院ノ御時ヲ納言通憲ノ男憲俊東寺ノ已講ニ補スル者ナリ其外ノ例備奉ニ不及ナリ

内供奉 有職ノ一ナリ亦ハ内侍ト云フ毎年正月禁中ニテ金光明經品勝王經ヲ講セラル時内供奉十禪師講師トナル内供奉ヨリ阿闍梨ヲ兼テ亦阿闍梨ヨリ内供奉トナルト互ニ其例アリト見タリ

阿闍梨 有職ノ一ナリ延曆寺息城寺東寺ホニ是職アリ清和帝貞觀十八年六月ニ延曆寺座主圓珍上表レテ内供奉十禪師傳燈大法師位兼雲ニ蘇悉地大法ヲ授テ三部大法阿闍梨トセト云ノ

上座 權三經ノ一ナリ十七大寺ニ此僧官アリ僧衆ノ上座ト云義ヲ以テ此名アリ高倉院ノ御時ニ源種法性寺ノ上座トナル類ナリ 寺主 權三經ノ一ナリ十七大寺ニ是アリ寺ノ主



云意ニテ寺主ト名ク上代ヨリ世職アリト見タリ孝徳  
帝大化元年ニ惠明百濟寺ノ寺主トナル類ナリ

都維那 權三經ノ一ナリ諸大寺皆世官アリ都維ハ五へ  
ツナクト訓不那ハ衆ナリ衆僧ヲ都維シテ檢校スルノ

義ト見タリ詳ニ僧官畧記ニ見タリ  
座主 比叡山延曆寺一山人貫首ヲ座主ト称ス其外ノ諸

寺ニモ同世称アリ東寺長者權大僧正成賢醍醐座主ト  
ナル類ナリ

檢校 高野山金剛峯寺一山人貫首ヲ檢校ト称ス一山大  
法會ノ事ヲ檢校スルノ義ナリ亦東大寺ニモ臨時ニ檢

校ヲ置テ大法會ヲ檢校セラル由ナリ  
別當 諸大寺各別當ヲ以テ長官トシ三經ヲ以テ次官ト

レテ一寺ノ儀ヲ管領セシム七十八代ニ糸院ノ時覺靈  
興福寺ノ別當トナリ同時ニ其弟勝遣東大寺別當トナ

ル類ナリ亦正別當權別當アリ其例偏舉スルニ違アラ  
ズ

長者 東寺ノ貫首ヲ長者ト云フ道柱年數衆僧ニ長タル  
ノ義ニ依テ世称アリト見タリ權大僧正成賢ニ糸院ノ

御時ニ東寺長者トナル類ナリ  
寺務 一寺ノ政務ヲ統領スルノ義ヲ以テ寺務ト称スル

ナリ座主長者ホノ義ニ同ジ  
長吏 一寺ノ任職ヲ長吏ト云フ醍修寺恩城寺ホニ世称

アリ亦横川長吏澄俊權大僧都ニ任スル由日記ニ見タ  
レバ諸寺ニ其号アリト見タリ





執行 法性寺ノ任職ヲ執行ト云フ一寺ノ政務ヲ執行ア  
ト云ノ義ナルベシ此外山門ノ注詔堅者真言宗ノ句當  
專當ノ類種種ノ別稱階級アリト見外然此一寺一山  
ノ式法ニノ記録ニ不載者ハ是ヲ畧スルナリ  
本朝官職備考卷之七

# 元祿八乙亥歲仲殊吉且



錦小路通新町西<sub>工</sub>入町

永田調兵衛

押小路通御幸町西<sub>工</sub>入町

上坂勘兵衛

堀川通佛光寺<sub>下</sub>町

梶川儀兵衛

## 書目肆

御幸町西<sub>工</sub>入町  
堀川通佛光寺<sub>下</sub>町  
梶川儀兵衛



